

## 弘法大師の宝号の歴史とその宗教的意味

日野 西 真 定

### 一 平安時代

弘法大師空海は、承和二年（八三五）に高野山で入定された。『二十五ヶ条御遺告』（第十七）に、「心有ラン者ハ、必ズ吾ガ名号ヲ聞イテ、恩徳ノ由ヲ知レ」とある。これによらなくても、実際、「名号（宝号）」をお唱えするか、「御影」を拜むか、大師を慕う方法はない。

宝号は、大師入定後、弟子達により、何等かの形で唱えられたかと思われるが、それを知る手がかりがない。

#### (1) 『拾遺往生伝』の蓮待の伝

文献にあらわれる宝号のもっとも古い事例は、『拾遺往生伝』の蓮待の伝に認められる。蓮待は、承徳二年（一〇九八）六月、往生の時が来ると、門弟らに輿で送られ大門から結界外の山中に入った。樹下で西方に向い、定印を結び、「南無三身即一阿弥陀如来・南無大悲観自在菩薩・南無弘法大師遍照金剛」と唱え、入滅している。

その翌日の明け方、門弟の一人に夢告があつて、蓮待は、金剛界曼荼羅の西方因菩薩のもとに往生出来たことが確認されたのである。西方浄土といつても、密教的なものである。

『高野山秘記』によると、大門の外側に阿弥陀が峯があり、「此ノ峯ニ依リ、人多ク往生ヲ得」とある。平安時代後から鎌倉時代にかけては、まだこの山に入って往生する人が多くいた。蓮待もその中の一人であつた。

『高野山往生伝』（仏教全書本）によると、この時、蓮待は、「南無三身即一阿弥陀如来・南無弘法大師遍照金剛菩薩」と唱えたとあり、観音菩薩が落ちてゐる。書写の間に書落されたか、または高野山ではこう唱えていたとも考えられる。

これから分ることは、①大師は信仰上では「菩薩位」におられると信じられていた。②阿弥陀如来と脇士の三尊は、弥陀・観音・勢至である。この場合、両菩薩は、弥陀に従つて、死者の極楽往生を助ける役にある。この勢至に大師が代えられたということは、大師自身がこの役を行う立場にある

ことを示す。

『高野山往生伝』では、弥陀と大師が一セットになり、大師が弥陀を菩薩位にあつて助ける役を勤めると解釈される。

この時代には、貴族は阿弥陀如来、庶民は地藏菩薩を信じる者が多かった。地藏菩薩には浄土はない。この尊は、人々を阿弥陀の浄土へ往生するのを助ける役を勤めている。また、各往生伝をみると、法華経と弥陀との組合せも多い。実例を示すと、『拾遺往生伝』（巻中）に、「肥後ノ国ニ一人有り、其ノ姓名ヲ失ウ」という人があつた。入道し「法華を受持シ、正念念仏シ、極楽ニ生レルコトヲ得」とある。晝は法華経の読誦、夜は念仏の行をする人も多くある。法華経は滅罪の功德が多く、この経を読誦し、先ず自分の罪・けがれを除き、その上で念仏申して極楽往生を願うのである。

法華経と念仏、弥陀と地藏のセットは、ともに極楽往生を願つての信仰であつた。これと同じケースに大師宝号と弥陀の名号があつた。先ず大師を念じ、その加護により、弥陀に救われてその浄土に往生出来ると人々は信じたのである。

## (2) 覚鑿の「弘法大師講式」

この中に、二点注目される記述がある。その一つは、大師に対し、「日々ノ影向ヲ闕ガサズシテ、処々ノ遺跡ヲ檢知ス」という文句である。これは、正和二年（一一三三）の『御宇多院御幸記』にもみえ、現在大門正面の聯にもかかげられて

ある。法性寺博陸殿下（藤原忠通へ一〇九七—一一六四）により

書かれたのが、そのはじまりだという（『高野山御幸御出記』）。これには、大師は御廟に入定してそこに留まり、念じる人々を救うとともに、一方ではここを出て処々を巡り、人を救うという信仰が認められる。つまり、大師信仰は、祖靈または神と同じ性格のものだと信じられている。その信仰自身も、この民俗信仰に結びついているのである。大師の「同行二人」の信仰も、ここから生れたのである。

次に、「南無帰命頂礼如来舍利本地法身法界塔婆、南無高祖大師遍照金剛入定留身舍利」とある。前者は釈迦如来に対する唱号、後者は大師の宝号ととれる。この二つを「舍利」で統一している。文中に、「舍利ハコレ菩提実義ノ大日、大師ハマタ成仏迹述ノ尊体ナリ」とある。つまり、釈尊も大師も大日如来の現れなのである。これは、覚鑿の密教の立場からみた解釈であるが、大師は如来の位にあるとみられ、前から格は上った立場にある、とされている。

## 二 鎌倉時代

### (1) 念阿弥陀仏所有の弥陀・大師の綾織像

平成七年（一九九五）、高野山霊宝館で、綾織の阿弥陀如来（立像、たて四十八センチ、はば二十六・四センチ）と弘法大師像（坐像・たて四十一・五センチ、はば二十六・五センチ）が、竹筒

（長さ約二十五センチ、径四センチ）に納められているのが発見された。ともに紺地に、如来は黄色、大師は白・茶色の糸で織られている。別に明王像のも一つあったと聞く。携帯用のものと思われる。

弘法大師絵像の裏面から、「南無大師明神 文永六年五月五日 念阿弥陀仏 勸進聖人」と墨書されている。文永六年（一二六九）は、鎌倉時代中期である。念阿弥陀仏という阿弥号の勸進聖が持ち歩いたものである。高野聖かと思える。

この「南無大師明神」という宝号が問題である。この点関連づけられるのが、「問答講本尊」と呼ばれる軸である。正応四年（一二九二）に山麓天野ではじめられた稚児ちご堅義の本尊だと云われる。その図容は、女体（丹生明神）・男体（高野明神）・法体（弘法大師）で、山岳修験では「三神三容」と呼ばれるパターンである。弘法大師も神の一員となっている。

鎌倉時代中期以後からは、弘法大師は神的存在として信じられている。こうして民衆の中にその信仰は定着し、今に及んでいる。その諸願をかなえて下さる存在となっている。

もう一体の弥陀像は、この他に明神像もあったことを考え合すと、念阿弥個人の信仰対象であったと思われる。大師宝号は、単独で歩きはじめている。

(2) 『掌中鈔』（後夜）の奥書

『掌中鈔』は、亮禪（一二五六―一三四一）が撰した。「後夜」

の奥書に、「嘉元四季之曆、暮春中旬之候へ人定じんじょう（人の寝しづまった頃）、燈下ニ冷テ之レヲ記シ畢ル、南無遍照金剛 照知シ給へ、金剛資亮禪」（原文漢文）とある。嘉元四年（一二三〇）は鎌倉時代後期に当る。これを書き終った時、亮禪は、「南無遍照金剛」と宝号を唱え、その加護を祈っている。

亮禪は、東寺宝菩提院の開祖である。この点を考えると、鎌倉時代の後期、この宝号は東寺を中心にして弘まっていたと考えられる。もともと、この関係の資料はさらに集めて研究する必要があることを断わっておく。

三 南北朝時代

(1) 『大師行状』附属「匡房卿申状」

大師宝前に「祈親燈」「白河燈」と呼ばれる二つの消えすの火が献ぜられたという伝承は、先ず『三僧記類聚』『高野物語』に出てくる。本書は、鎌倉時代の撰である。これをさらに展開させたのが、南北朝時代成立の『大師行状』付録「匡房卿申状」（『弘法大師伝全集』第九）と、室町時代成立と考えられる『高野由来記』（正智院藏）と『宗論平家物語』（『伝全集』第九）とである。

「匡房卿申状」には、「南無婦命頂礼 遍照金剛大師」「南無婦命頂礼 高祖大師遍照金剛」という二つの大師宝号が出て来る。さらに『高野由来記』には、「南無大師遍照金剛」

という、今日使われている八字の宝号が記されている。

「高野物語」は、この兩燈は、「御影堂」に祈親と白河上皇の二人によって点ぜられたとする。それが、「匡房卿申状」以下になると、奥の院拜殿（燈爐堂と俗称）に移っている。この点から、同書にみられる大師宝号は、南北朝時代、奥の院の僧達の間で唱えられていたものと考えられる。室町時代になると、八字の宝号が、やはり同衆により唱えられるようになって<sup>(1)</sup>いる。

#### 四 室町時代

##### (1) 親王院藏『十住心論』

親王院藏『十住心論』は、文明十五年（一四八三）に、無量光院印融（一四三五—一五一九）によって書写された。第四卷の奥書に、「南無大師遍照金剛 悉地証明シ仏子ヲ擁護シ玉へ」とある。印融は、晩年自分の出身地である関東地方に帰り、横浜市三會寺<sup>さんね</sup>に住し、この地方の密教教学の興隆につくした。その人格は、人々に尊親され、関東八州六十余箇所の談林所（学問所）には師の肖像がかかげられ、毎年法要が営まれるほどであった。

この点から、印融によって、この八字宝号は、関東地方には、室町時代中期に弘まっていたと考えられる。

##### (2) 「珠禪敬白文」

珠禪の敬白文は、五来重先生が、元興寺極楽坊の弘法大師座像の胎内文書として、『元興寺極楽坊中世庶民信仰資料の研究』「元興寺極楽坊弘法大師座像胎内納入物」に紹介されている。

この像は、鎌倉時代平中二年（一三三五）の造立であるが、その胎内には、その後いろいろな奉納物が収められてある。これもその中の一つである。銘文には、「南無大師遍照金剛此ノ値遇ノ因縁ヲ以テ、生々世々、御加持力ヲ以テ親近<sup>しんじん</sup>シ奉り、来生ニ都卒天ノ内院ニ生レ（中略）、弥勒慈尊ヲ拜シ、大師遍照金剛下ノ閻浮ニ度生セン、珠禪啓白」とある。

弥勤の浄土への往生を願い、大師宝号を記している。五来先生は、この文書は室町時代のもものとされている。珠禪の住房など分らないが、この時代に、八字の宝号が、一般化したこと<sup>(2)</sup>の資料となる。

先生は、この八字の宝号は、浄土系の名号や、日蓮宗のお題目に対抗して、真言宗の僧がつくったものだとされている。

##### (3) 松山市浄土寺（第四十九番札所）厨子と香川県国分寺（第八十番札所）本尊の楽書

この二つは、近藤喜博氏『四国遍路』に紹介されている。浄土寺厨子の羽目板には、四国中通路同行五人のうち、阿州名東住人 大永七年七月六日（中略）、南無大師遍照金剛守護

とある。厨子の桁には「金剛峯寺谷上惣職善空 大永八年五月四日」とある。

国分寺本尊には、「同行五人 大永八年五月廿日 □□山谷上院穩□□南無大師遍照金剛 二親ノ為、南無阿弥陀仏」とある。大永八年（一五三八）に、同行五人を谷上院の僧が引卒して同寺に参っている。この僧は、浄土寺の楽書から考へ同一人で、しかも高野山の僧と考えられる。「谷上院」は「谷上院谷」のことで、楽書は、結縁のためのものである。

室町時代後期の大永七・八年の頃には、四国へ高野山の僧により、八字の宝号は弘められていた。

(4) 犬銅山転法輪寺の石碑

奈良県五条市の犬銅山転法輪寺は、「南山の犬飼」という狩人と弘法大師が出会ったゆかりの寺として有名である。同寺境内には、古墳があり、これらを大師塚、明神塚といい、その上に石碑が建てられてある。その建立期日は同じで、大師塚のには、「天文廿一年 南無大師遍照金剛 二月廿一日」とある。天文二十一年（一五五二）には、この地方に八字の宝号が伝播していた。

(5) 高野山不動院の釣燈炉

不動院本堂の釣燈炉に、永禄十二年（一五六七）に実相院谷快勢が、自身の逆修のために奉納したものがあつた。刻文に「南無大師遍照金剛」とある。

まとめ

大師宝号は、平安時代後期から文献に現われるが、菩薩位にあり弥陀の浄土への往生を助ける存在であつた。鎌倉時代から、独立した呪とし、神的存在として、諸願に応じることが出来るようになる。室町時代中期、高野山の印融らにより八字の宝号はつくられ、同後期には、四国など全国に流布された。一方、「南無遍照金剛」の宝号は、鎌倉時代東寺の僧達によつてはじめられたが、八字の宝号ほど、庶民には弘まつていない。

1 高野山大学図書館所蔵（真別所寄託本）による。

2 詳しくは、拙論「高野山の燈明信仰と僧侶の唱導活動」『説話と思想・社会』（86, 87）にある。

3 西南院蔵「印融法印御真蹟」と題する折紙の断片があり、これにも八字の宝号が記されている。室町時代のものである。

4 巽三郎。愛甲昇寛共著『紀伊国金石文集成』一八九頁。

〈キーワード〉 弘法大師、宝号

（高野山大学非常勤講師）